

大学における地域子育て支援[†]

(2) しゅくたん広場での日曜講座・箱庭療法体験講座に関する実践報告

番匠明美・井上千晶

BANSHO Akemi・INOUE Chiaki

本学の地域子育て支援ルーム「しゅくたん広場」が開室から2年目を迎え、新たに取り組んだ2つの試みについて報告する。平日に実施する定期講座はほぼ母親の参加となっている。しかし、子育ての大切な協力者である父親にも、子どもとかわる楽しさを味わい、父親らしい子育ての大切さを実感してもらいたい。そこで、父親が参加しやすい日曜講座を開催した。そして、参加した父親たちの子育てに前向きに取り組みたいという気持ちを支えることが出来た。また、母親達が抱えているそれぞれの思いを表現し、自分の子育てに自信を持って元気に子どもと向き合えるように、あるいは母親が自分の生き方を考えることが出来るようになってほしいと考えている。そこで、集団の講座ではすくい取りにくい個々の思いに対して、箱庭療法を1つの道具として取り入れ、体験講座を試みた。以上の2つの実践報告を通して、大学における子育て支援の方向性を検討する資料としたい。

キーワード：地域子育て支援・家族支援・箱庭療法

1. はじめに

本学において、平成21年10月に開室した「しゅくたん広場」は、兵庫県西宮市の少子化対策の取り組みの一環として、地域子育て支援センター事業の「広場型」に位置づけられるものである。本学は以前より大学内外の行事や取り組みを通して、地域との結びつきが深い。そのため、子育て支援の実践においても、本学の特色を生かし、新しい親と子の育ちを考える〈地域のたまり場〉の役割を担うことを目指し取り組んできた。

これまでの「しゅくたん広場」の利用状況から、2才までの親子が90%以上を占めていること、週1回以上来室するケースが19%あり、周辺地域に居住する親子の利用が約70%あることなど、広場が地域に根ざした親子のための生活の一つの場として機能し始めていることが捉えられた。また定期的に開講する講座への参加や図書館等の学内施設の利用などが主に母親達にとって子育てをしつつ、自分自身の生き方を考える糸口となっていること

がうかがわれた。一方、次世代を担う学生達にとっても、構内で利用者親子と出会うことや、ボランティア等として広場を利用する中で交流が深まり、それらの経験が彼らの学びに役立っていくことも見受けられた。これらの実践に関してはすでに研究報告(井上他、2010)で検討してきた。また、そうした取り組みの中から、夫婦や世代間の問題が子育てにも影響を与えていること、母親達が日々の子育てのなかで様々な思いを気持ちの中にためていることなどが問題として浮かび上がり、新たな課題となった。そこで本研究では、これらの課題に対する取り組みとして、まだ実施回数は少ないが、開室2年目に新たに実施した父親参加型の日曜講座による家族支援と心理療法の一技法である箱庭療法を利用した体験講座を取り上げ、今後大学という場で行っていく子育て支援の可能性を検討するための実践報告としたい。

2. 日曜講座における試み

地域のたまり場としての役割を担うなか、不足しがちな父親と子どものかかわりを援助することに目を向け父親の参加を目的とした講座の取り組みを行う。オープンキャンパスが開催される日曜日にあわせ、「しゅくたん広場」を開室することにした。「しゅくたん広場」を体験してもらい、子どもとのかかわり方や遊び方を父親に伝えたいと考えた。また、オープンキャンパスのイベントにも参加し、高校生との交流も生まれ、家族で楽しめるようにした。家族同士がかかわりやすい人数を考慮し、10組の親子を募集した。

【日曜講座の内容・参加状況】

父親参加の講座を開講するにあたり、どういった内容の制作にするのか保育アドバイザーと検討を重ねた結果、季節感があり、日常使えるものにする。誰もが少しの工夫で完成させることができ、達成感や満足感を感じられるものにしたいということが決まった。講座の参加は一回限りの人がほとんどなので、次にはもっと良いものを作りたいという気持ちより、満足の行くものが出来た、楽しかったと思ってもらうことが重要だと考えた。制作については得意なお父さんもいるだろうが、苦手なお父さんもいるので家族の前でお父さんが中心となり活躍できる場をすることを目的にした。

その結果、次のような内容の講座を行う。

〈ペットボトルで風鈴作り〉

・新しい素材キラキラシール色紙やペットボトルという身近な材料を使って親子で楽しく風鈴作りをする。上から10センチ程度に切ったペットボトルの中に鈴を紐で通しキラキラシール色紙で飾り完成させる。キラキラシール色紙を用いてスタッフが子どもの喜びそうな飾りシールを数種類準備したのと、他にも少し手を加えるだけで飾りシールが完成できるように様々な形に切ったものを準備した。初めて触れる素材キラキラシール色紙に興味津々だった。準備していた飾りシールも「かわいい」と好評だったが保育アドバイザーが作った飾りシールに刺激を受けて「作り方を教えて下さい」と言うお父さんがいた。紙にイラストを描いて教えたと子どもさんのために一生懸命作って完成させた。後で聞くと子どもさんの大好きなキャラクターだったそうだ。



「お父さんのおひざに抱っこ」「かわいいアンパンマンの風鈴完成」

〈オリジナル布カバン作り〉

・布描きクレヨンを使って親子で自由に一緒に描くことを楽しみながら布カバンを完成させる。布描きクレヨンを使ってカバンに描いたり、フェルトを切り抜いて作った花を木工用ボンドで貼り付けて完成させる。クレヨンはアイロンで熱を加えると色が定着する。このようなクレヨンがあることを知りとても関心を持ったようだ。

カバンの両面に描くことができるので一面は子ども、もう一面はお父さんというように分担して描いたり、両面とも子どもたちの描きたいように自由に描かせ、フェルトを切り抜いた花などはお父さん、お母さんが思い思いの場所に貼るといった姿が見られた。

今回の講座に参加した子どもは年齢が低いためなぐり描き程度しかできないが、パステルカラーを用いて描いたのでそれぞれかわいく仕上がった。昨年と同じ布カバン制作をした親子が一緒にいたが昨年に比べて絵に成長が見られたので嬉しく思う。実際に買い物などで使いたいなどの言葉が聞かれた。



「お父さんと一緒にできてうれしいな」「どんなカバンができるかな」

〈うちわ作り〉

・親子でうちわ作りを楽しみ季節感を味わう。あらかじめ、うちわの骨組みに和紙を貼り土台を作っておいたものに子ども達がブチマジ（小さい子ども用のマジック）でなぐり描きや、キラキラシール色紙で作ったシールを貼るなどして完成させた。キラキラシール色

紙を丸、三角、四角に切ったものやクラフトシールなども用意しはさみで切るなどそれぞれ工夫を凝らして飾りに奮闘する姿が見られた。

初めて参加されるお父さんばかりの講座だったので、珍しい素材に触れ親しみ、童心に戻って楽しむ姿が印象的だった。

* いずれも制作の内容は簡単なものだったが、家庭ではあまり手にすることのない材料、素材を提供したことで興味を持って楽しく参加でき少しの工夫で作れるということを知り「やってみよう」「やりたい」という気持ちを持ったようだった。手遊びや絵本の読み聞かせも毎回行ったが、覚えようと大きな声で歌ったり小さい子どもの手を取り身振り手振りをまねさせようとする姿も見られた。「広場」で日頃親しんでいる体操なども一緒に楽しむ。ほとんどが父親、母親と家族での参加であったが、父親と子どものみの参加もあり「今日はお母さんにゆっくりしてもらいます」という声も聞かれた。一方、父親が急に勤務になり母子と祖母の参加という家庭もあった。



「かわいい♪うちわができました！みんなではいチーズ！」

【講座を終えて】

普段から父親は「しゅくたん広場」の様子について母親から聞いているが、どんな場所か想像の域を超えることはなかった。今回参加することによりわが子の気に入りのおもちゃを知り、同じ年頃の子どもと遊ぶ姿を見た他、他の家族との交流もできた。父親も子育てに協力し、母親の負担を軽減したいと思っていたが、子どもの世話は母親の方が上手だと思い、自信を持っていないことがわかった。遊びの実践方法を知り、自信を持って子ども

と接することができるようになり、「しゅくたん広場」が夫婦共通の話題となった。「今日もしゅくたん広場どうやった？」が父親の帰宅後の第一声になっていることや制作した作品は家庭で飾ったり、実際に使っており、見るたびに楽しかった制作のひと時を思い出しては心を和ませているとの報告を得ている。(井上)

3. 箱庭療法体験講座における試み

【体験講座の方法とねらい】

本学では学生相談室に心理療法の1つの技法である箱庭療法の用具が設置されている。学生たちが相談室で心理療法を受ける中で利用したり、授業で箱庭療法を知った学生が自分のことについて考えるために一度やってみたくて来室し、この療法を体験することがある。こういった学生とかわるなかで、筆者はこれまでも比較的健康度の高い学生達が、箱庭療法を体験することで自分自身と向き合い、新たな可能性に気づいていく点に注目してきた(番匠、2009)。そこで、広場を利用する母親たちも、日々の子育ての中で感じている、少しずつ心の澁のようになって積み重なっていく、言葉にしにくい思いを箱庭療法の体験を通して 表現し、見つめ直すことが出来るのではないかと考えた。明日からの子育てに向き合い、自分らしく生きることを考えるための糸口として、箱庭療法を子育て支援の講座として取り入れることにした。月に1回定期的に開かれる講座とは別に、箱庭療法体験を希望する利用者から予約してもらい、一人約一時間程度の時間設定で行っている。母親が学生相談室で箱庭療法を体験している間、子どもは広場で祖父母や父親あるいは広場主任の教員がかかわることになっている。箱庭制作後、母親と筆者とで出来上がった箱庭をみながら、表現されたものについて話し合う時間を持つ。開室から2年目を迎え、新しい取り組みとしてこの体験講座を開設した。諸条件を調整しながら、実施時間を決めていくため、ほぼ月1回のペースで行い、これまでに10人の母親が体験している。まだ事例数は少ないが、それらの箱庭に表現された世界と、その体験の中で母親によって語られたものから見えてきたことについて報告し、本学の特色を生かした、大学で行う子育て支援の方向性を考えていきたい。

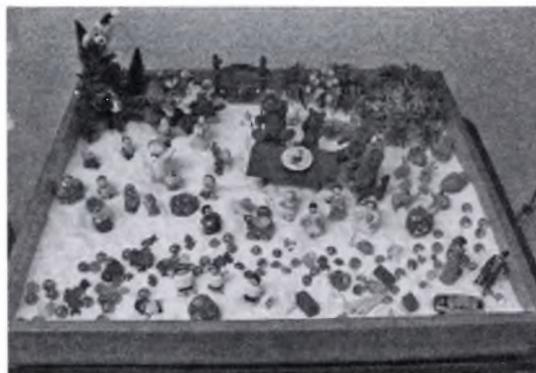
【大学における子育て支援としての箱庭療法体験】



(箱庭1)

箱庭1：箱の向こう側は自分の家族を連想して置いている。手前左側は砂を掘り、水の中に2匹の金魚を置く。水辺にはのんびり休んでいる感じのかえるが2匹いる。この制作者は水辺が好きで、水があるとほっとできること。作品に題名はつけていない。筆者は全体的にシンプルで、しずかな印象を受けた。

箱庭1を制作した母親は、まず初めに箱庭の中におだやかな家族の生活を表現された。そして箱の右手前には何も置かず、最後になって小さなかわいい宝箱だけをそっと置かれた。制作後にいろいろと話し合う過程で、筆者がその宝箱について、「ここだけはまわりと少し違った大事な場所になっているように感じますね」と感想を述べると、「ここには大切なものや、いらいらしたこと、しんどいことが詰まっていて、たまに溢れそうになって、ふたがカタカタとなるけれど…」と人におしゃべりすることが気持ちの解消になっていることが語られた。そこから話題が兄弟の問題に向けられ、それについて筆者からアドバイスをし、今後も必要な時には広場の保育アドバイザーや筆者などと相談できることを伝えた。この母親は兄弟の問題で、現状をそういうものだと言いつつもイライラ感を募らせていたようである。箱庭療法体験を通して、これまで気がつかなかった子どものかかわり方をアドバイスされ、試しにやってみようという子育てに対する前向きな思いが生まれたことと、また何かあれば気楽に相談できる場所を得た安心感とで、気持ちがすっきりと落ち着いたようであった。



(箱庭2)

箱庭2：ビー玉を並べて作られた川より手前は現実的な世界を表現している。この川より向こう側はファンタジーの世界。箱の一番奥には森があり、少し開いた門も置かれ、その向こう(箱の外)にもまだ何か世界が広がっていると感じさせる。玩具がたくさん使用されたことで、とてもにぎやかで楽しい印象を受ける。その一方で、箱の中を多くのフィギュアで埋めておかなければ心配という制作者の不安な気持ちも感じられる表現である。しかし、ところ狭しとフィギュアが詰め込まれた表現は、その中でクマの家族や女の人の一生など、それぞれ小さなまとまりでテーマを持っており、微妙なバランスを保つてうまく箱の中に納められている印象を受けた。

この箱庭を制作した母親は箱いっぱい溢れんばかりのイメージを表現された。ミニチュア玩具が箱の中にたくさん置かれ、混乱している印象はないが、日常的な表現がファンタジックな世界に埋もれてしまっているように感じられた。筆者のその印象について母親と話し合うなかで、豊かなイメージを大切にしながら、子どもとかかわる時には少し気持ちを整理し、ことばをかけるようにしていこうという方法を見つけいった。

広場の保育アドバイザーから日頃の様子を筆者は聞いていたため、箱庭作品から考えられることを参考に、この母親に何かを伝える時には、たくさんの事を一度に言わず、わかりやすい表現で示すことなどを保育アドバイザーに伝えた。そして、この親子の安定したかかわりを支えていくことが広場でのやりとりの中からもできるような調整を試みた。

箱庭療法は治療者に守られた中で制作するというプロセスが、治療のためには非常に重要な部分である。そし

て、より健康度の高い人の場合、制作後に出来上がった作品を制作者と治療者とで共に味わい、見ていく過程で、両者の間で箱庭表現について「語られること」が、ことばにならなかった思いをことばにし、意識化していくという意味で、非常に大切なことと感じている。

特に、子育て中の母親の場合は、箱庭を制作することを通して、子育てをする以前の自分自身に目を向け、時間に追われて流されがちな現在の生活やその中で感じている思いに気持ちを止め、これからの問題に向き合っていくようにするようである。

そのような心の動きはある母親の場合には、自分自身の幼少期の母親との関係におよび、そこからの視点で、さらに現在母親となった「私」と子の関係を見つめ直すという心の作業に至ったこともある。

また、箱庭に表現されたものを通して、ある母親は産休後に復職することに関して抱えている不安な気持ちを語る過程で、実は仕事のことよりも今後自分がどのように生きていきたいのかという心の奥に仕舞い込んでいた問題に気がついていったケースもある。

現在は原則として1回のみ体験講座となっているが、必要に応じて継続できる形式を検討し、母親達が自分の中から出てきたことばをつかみとっていくような心の作業が行える場を箱庭療法を通して提供していきたいと考えている。

最後になったが、本学の広場は出入りが自由な場ではあるが利用者はリピーターが多いため、広場主任の教員や保育アドバイザーが利用者の親子の様子についてかなり把握することができている。そういった安定した関係性が背景にあるからこそ、本学の広場の特色を生かした形で箱庭療法を体験講座として設けることができていることを記しておきたい。(番匠)

4. 今後の課題

母親だけでなく、その家族を地域が見守り子育てを支えていくこと、また、一人一人の思いを大切にしていって向き合っていくこと、そこから父親が参加できる講座を試行し、また心理療法の技法を取り入れた講座を開催している。さらに、こういった体験の中から、支援されてきた人が支援する者へと育っていくような橋渡しの役割を、教育の場である大学における子育て支援の役割の1つとして考えていきたい。

また、本学では学生たちが気軽に、身近に母子と触れ合うことの出来る広場となっているが、学生ボランティア等の利用はあまり進んでいないのが現状である。将来保育の現場や母親となりうる学生たちにとっては非常に貴重な経験を積むことの出来る機会である。例年行っているが、授業で利用することも含め、学生たちの体験の場として、活用度を上げていくことを検討している。

さらに、活動を学内に限定せず、地域に出張し、広場の開催を行い、親子が集うことで大学内にて培ってきたものを逆に大学周辺地域へと還元できるような取り組みも今後実現させていきたい。

文献：

- 1) 井上千晶・番匠明美・三木麻子 2010 大学における地域子育て支援—しゅくたん広場での実践 夙川学院短期大学 教育実践研究紀要 第3号 pp17～24
- 2) 番匠明美 2009 保育者養成コースにおける“表現する”活動の試み(Ⅲ) —箱庭療法体験の実践例より—夙川学院短期大学 教育実践研究紀要 第2号 pp.64～71

<付記>

本稿は、夙川学院短期大学 児童教育学科 しゅくたん広場主任と担当者である筆者らが「全国保育士養成協議会第50回研究大会」(2011年9月9日)において発表した内容をもとに加筆修正したものである。

最後になりましたが、しゅくたん広場における日々の活動や種々の講座開催等を通して、常に本学らしいおだやかな空気感を保ってくれている保育アドバイザー(原田佳代・森岡望・新山友里)の先生方に感謝致します。

<ピアスーパーバイザーからのコメント>

本報告では地域子育て支援ルーム「しゅくたん広場」で新たに開講された2つの講座の実践例により、大学における子育て支援の可能性が述べられている。各体験講座の様子の詳しく具体的な説明により、これらの実践が「支援されてきた人が支援する者へと育つ為の橋渡しのような役割」となっていることが理解できる。今後も「しゅくたん広場」が利用者のみならず保育者を目指す学生、また学生を指導する教員にとっても「支援についての学びを深める場」として、更に発展してゆくことを期待する。

(担当：児童教育学科 林 有紀)